

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「パレスチナ/イスラエル紛争の変容 2:100 年史と重層的現実」(令和 7 年度第 1 回研究会)

日時：令和 7 年 6 月 20 日（金曜日）

午後 3 時～午後 7 時

場所：東京大学駒場キャンパス 18 号館/Zoom によるオンライン同時開催

報告者名・報告タイトル：

立山良司(AA 研共同研究員・防衛大学校名誉教授・日本エネルギー経済研究所客員研究員)

「パレスチナ/イスラエル紛争の捉え方：主な私の関心事項」

臼杵陽(AA 研共同研究員・日本女子大学名誉教授)

「民族・宗教・宗派問題とパレスチナ/イスラエル紛争」

立山良司氏の報告では、イスラエル政治の変遷、安全保障政策、中東和平プロセスに関する主要な論点について、自身のこれまでの関心事項を中心に整理しつつ、現状分析と課題が論じられた。冒頭では、労働党からリクードへの政権交代と、イスラエル社会の右傾化の要因が検討された。続いて、政軍関係や核戦略、イランに対する脅威認識を軸に、安全保障政策の分析を行った。米・イスラエル関係については、ユダヤ・ロビーやキリスト教福音派の影響に触れ、「特殊な関係」の実態を明らかにする意義を論じた。中東和平プロセスについては、オスロ合意の挫折を通じて、和平の非対称性とその失敗に関する研究の必要性を指摘した。また、平和構築に関しては、adaptive peacebuilding に基づくヘブロンでの成功事例と米国主導の SSR の失敗を考察した。質疑応答では、パレスチナ/イスラエルを取り巻く国際関係、イスラエル社会の分断、イランに対する脅威認識が主な論点となった。

臼杵陽氏の報告では、アラブ地域における民族・宗教・宗派の多様性を軸に、イスラエル／パレスチナ紛争の歴史的背景とパレスチナにおけるキリスト教の現状が論じられた。はじめに、A.ホーラーニーの経歴とその著作を紹介し、彼によるアラブ地域のマイノリティ分類を紹介した。1947 年時点の議論を通じて、イスラエル建国によるマイノリティ分類の変化が示された。また、板垣雄三氏の中東構成論を踏まえ、中東における宗教・民族紛争が国境線と民族・宗派の居住分布の不一致に起因する点を論じた。さらに、パレスチナのキリスト教徒や各宗派、東方諸教会の歴史的背景、各宗派の典礼に関する解説を通じて、宗教的多様性の実態を明らかにした。質疑応答では、パレスチナ/イスラエルにおけるマイノリティの動向、ホーラーニーのマイノリティ区分および板垣雄三氏の構成論、パレスチナのキリスト教徒に関する議論が交わされた。

東佑太（東京外国語大学大学院博士前期課程）

(以上)